新型コロナが残したもの

五十嵐朋子

ドイツでは、新型コロナウイルスの流行の名残を感じることはほとんどない。街中ではもちろん、病院でも医師すらマスクをしていないからだ。消毒液のボトルを見かけても、中身は空だったりする。

そんなドイツで、根強いコロナの影響を実感する場面が一つだけある。極右政党「ドイツのための選択肢（ＡｆＤ）」の支持者に取材する時だ。

ＡｆＤはドイツが中東から多くの難民を受け入れた２０１５年以降、反移民・難民を主張して支持率を上げた。近年では急激に右傾化し、主張も民族主義的になっている。

ＡｆＤのイベントで参加者に支持の理由を聞くと、移民問題を挙げる人がほとんどだ。だが、コロナがきっかけと語る人もかなり多い。「政府の行動制限に疑問を持った。ＡｆＤがそれに抗議していた唯一の政党だった」というのが代表的な理由だ。

ドイツはコロナ禍の最中に都市封鎖（ロックダウン）などの措置を取った。当時のメルケル首相は論理的に予防接種の必要性を説き、国民に向けて訴えた。

一方のＡｆＤは政府の対策を批判したものの、これといった対案を打ち出せず、支持率は10％以下に落ちていた。だが、政府が進める「自由の制限」に疑問を持った人がＡｆＤの主張に関心を持ち、支持拡大の基盤を固めていたという側面はありそうだ。

25年９月、東部テューリンゲン州でＡｆＤ関連のイベントが開催された。参加したＡｆＤ支持者の女性は、コロナを機に「目が覚めた」と話した。女性の友人は何度もコロナにかかったといい、女性はワクチンこそが感染源だったと信じた。「政府はうそをついている。大きな力に操られているからだ」と言葉に力を込めていた。

こうした「陰謀論」はコロナを機に勢いづいたが、あらゆる政策で政府を批判するＡｆＤの支持層と親和性が高いとも指摘される。最近の世論調査で、ＡｆＤは与党の統一会派「キリスト教民主・社会同盟」と支持率１位を争うほどだ。その人気はコロナだけでは説明できないが、パンデミック（感染症の世界的流行）が社会に与えた影響の大きさを考えずにはいられない。